

間接話法に現れる時制の同定

丹 羽 都 美

Identification of Temporal Reference in Indirect Speech Sentences

Satomi Niwa

This short paper discusses temporal construal of indirect speech sentences, especially paying attention to an interesting phenomenon, Sequence of Tense (SOT), and its exceptions. SOT is understood as a kind of rule which converts the tense of the embedded clause with respect to the tense of its matrix clause. Tense itself has its own identification as [\pm past], but it also appears that tense is a kind of 'relative' index, and that what it really denotes is determined along with other temporal factors in the same sentence. Based on this consideration, with few modification to the previous analyses on the subject, a possible computation of temporal reference identification is suggested.

Key words

Sequence of Tense, tense, Infl, ZP, Speech Time, ZP operator

1. 序 論

英語などの言語には時制の一致と呼ばれる現象がある。しかしながら、日本語などには時制の一致は一般的に見られないということが観察されている。また、時制の一致が生じる言語においても、時制の一致の例外と呼ばれる事例も多く存在している。これまでに、このような現象について、統語論的な立場で様々な研究が行われてきたが、本論文では、時制の一致の例外について、主節、従属節の動詞の持つ意味と語句の統語関係に注目して、意味解釈を分析する。ここでは、Chomsky (1995) の最小理論の枠組みをもとに、Stowell (1993 a, b) の Zeit Projection (ZP) という考え方を取り入れて、話者が自分の時間概念を条件によっては文の中に組み込めるという事実と、主節及び従属節の命題の意味とに注目しながら一つの分析を試みることにする。

この論文は次のような構成になっている。この序論に続いて、まず、時制の一致という現象について概観する。次に時制の指示決定にどのような要素が関わってくるのかを考察する。これらの考察をもとに、時制という素性の持つ特性に目を向け、文中の他の時制に関する要素との相互作用について構造的な分析を試みる。最後に他言語の間接話法の時制について概観する。

2. 1 時制の一致

b. ジョニーはお腹が空いていたとマリアは言った。

b Maria said that Johnny had been hungry.

Referent time 発話の命題（主節）が起きた時（R）



しかし、この枠組みには、Enç (1987) が指摘した「投錨」という考え方を加えなければならない。話者が発話の中に使用する時制を決定するのはどのようにしてであるか、ということを考えてみると、時制が決定されるのは、話者が発話をしたときが常に(話者にとっての)「現在」となり、それが、命題に示される出来事の時間的な流れを解釈する基点となっていることがわかる。その話者が立地する「現在」を基軸にする、ということを「現在時制」の「位置」に「投錨」して話をする、という捉え方をするのである。このような、文の中に表現されない「現在」というものの存在が時制解釈には大きく関わってくることを今後見ていくことにするが、ここでは、もう少し時制の一致について基本的な事柄を先に見ておくことにする。

本来は、誰かが言った言葉を第三者に伝える場合、そのまま相手に伝える直接話法と、自分の言葉に言い換えて伝える間接話法とがある。(2 a) (2 b) をそれぞれ直接話法と間接話法で対比すれば次のようになる。

- (6) a. Maria said, "Johnny is hungry."
- b. Maria said that Johnny was hungry.
- (7) a. Maria said, "Johnny was hungry."
- b. Maria said that Johnny had been hungry.

英語の間接話法に見られるような、話者の立場 (Speech time) から見て出来事が起きたのはいつになるのかを定形従属節に明示する現象、言い換えれば、主節の動詞の時制と「一致」させて時制を明示する現象を「時制の一致」と呼ぶ。一方、(1) (2) を比較すればわかるように、日本語にはこのような現象は起こっていない。英語においては、従属節にも独立して時制が明示されるが、日本語においては、(1 a) の従属節からわかるように時制は現在形もしくは原形のようなものである。(1 b) のようにして時制を明示してしまえば、日本語では、主節の時制よりひとつ前の時制を指示してしまう。従って、日本語には「時制の一致」が観察されないとされるのである。この言語間の相違については、時制の一致のメカニズムを解明する上で言及することになるが、時制の一致を示す言語である英語にも、実際、「時制の一致」の例外と呼ばれる現象も普通に多く観察されている。時制の一致が生じたり生じなかったりするのは何によるのか、これについて、次節から概観することにする。

2. 2 時制の一致の例外

2. 1 で概観した「時制の一致」という現象には、例外となる現象もごく普通に多数見受けられる。一般に、従属節の命題が(8)に表されるような普遍の真理である場合や、現在の習慣などを表す場合がその代表的な例である。

- (8) Teacher told us that the earth moves around the sun.

また、(2 a) と同じ内容を相手に伝える場合など、次のような例もよく見受けられる。

- (9) Maria said that Johnny is hungry.

(9) では、従属節の時制が現在形になっていて、主節の動詞の時制と従属節の動詞の時制が一致していない。従って、主節・従属節の時制の一致が起きている(2 a) とは少し解釈が異なる。(9), (2 a) とともに、Maria が Johnny が空腹であると知って、それをこの発話者に告げた、という過去の出来事を述べているのであるが、(9) では、それに加えて、「Johnny は発話の時点でも空腹である」ということが従属節の時制によって示されている。一方、(2 a) の場合、従属節の時制が明示するように、現在どうであるかは言及しておらず、聴者はその判断はできない。(9) の発話は、話者が「まだ自分の発話の時点でも Johnny は空腹である」という判断、もしくは知識を持っていて、その情報を従属節の中に組み込んでいるのである。同様の例文が、(10) である。

- (10) a. Maria said that she is pregnant.
- b. Maria said that she was pregnant.

このような時制の一致の例外と見られる現象の意味解釈について様々な研究が行われてきた。これらの先行研究について検討しながら、本節で見た、話者が自分の時間概念を条件によっては文の中に組み込めるという事実と、主節及び従属節の命題の意味とに注目しながら一つの分析を

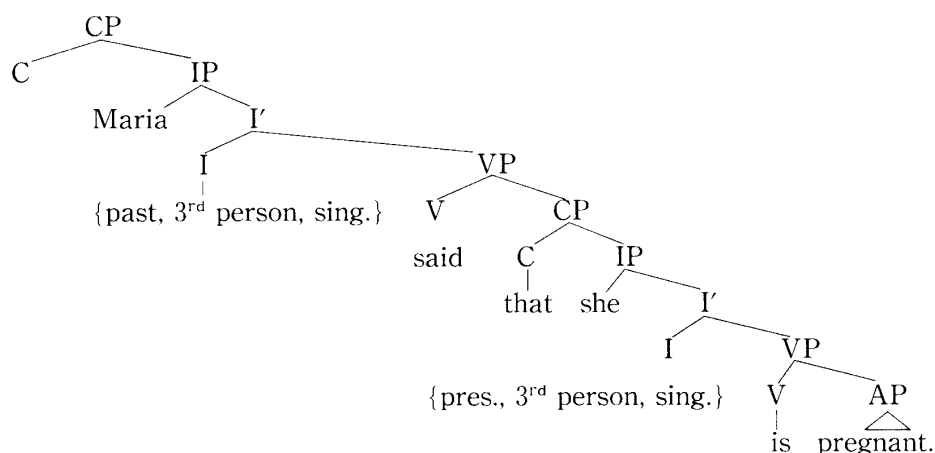
試みることにする。

3. 命題と時制の一致

3. 1 基本構造

議論を進める前に、この議論において基盤となるいくつかの点について明示しておく。この分析では、生成文法の立場から、Chomsky (1995) の最小理論の枠組みに基づいて、文の基本的な構造を考えることにする。⁽¹⁾ 例えば、(10 a) は次の構造を持っていることになる。

(11) (= (10 a) Maria said that she is pregnant.)



この構造形に基づいて以後の議論を進めていくことにする。

3. 2 時制の一致と主節の命題

3. 2. 1 主節の動詞句

第2章で、英語においての時制の一致と時制の一致の例外の代表例を簡単に提示したが、実際、時制の一致が行われるのが、通常無標の状態と考えられ、従属節の命題の時間関係について話者の考えが反映されるのが時制の一致の例外ということになる。しかしながら、話者はどんな場合でも時制の一致の例外を引き起こすことができるわけではない。

(12) a. He whispered that his girlfriend had blue eyes.

b. *He whispered that his girlfriend has blue eyes.

彼のガールフレンドの目の色は発話の時点でも変わっていないわけであるから、これまでの例で考えれば (13 b) は適格文となってよいはずであるが、適格文とはならない。しかし、主節の動詞 whispered を said に置き換えると、

(13) a. He said that his girlfriend had blue eyes.

b. He said that his girlfriend has blue eyes.

このように、主節の動詞が、whisperのような様態を表す動詞である場合に、時制の一致の例外が認められないとされている。これは、様態を表す語句をあえて使う、ということが、即ち、相手が言ったことをなるべくその様子と共にそのまま伝えようという気持ちが働くからなのかもしれない。従って、話者は従属節の内容には自分の意見を差し挟むことが許されないのであろう。

この (12) (13) の場合から、主節の動詞、もしくは、従属節を統御する要素によって、従属節

には、話者が自分の意見を加えることのできるものとできないものがあるということがわかる。これは主節の動詞、又は、動詞の投射が何らかの通過不可能な「壁」を作り上げている、ということである。

また、時制の一致を示す文と時制の一致の例外となる文中で、時制を持つそれぞれの要素が指示する時制について見てみよう。

(10) a. Maria said that she is pregnant.

b. Maria said that she was pregnant.

2. 2 で言及したように、話者は常に発話の時点が現在という軸になっている。この軸を元に、(10 a) では、Maria が話者に従属節に表される命題を伝えたのも従属節の命題も、話者の立つ現在という軸に並ぶことはなく、「過去」という表示がなされている。一方、(10 b) では、Maria が話者に従属節に表される命題を伝えたのは「過去」であるが、従属節の命題は、話者の立つ「現在」と同時になっている。どちらの文の中にも話者が立っている時点を「現在」であると表示する要素はどこにも明示されていない。文を生成する話者も、それを解釈する聴者も発話の時点に常に無意識のうちに基点としているのである。そして、(10 b) においては、この基点となる「現在」と従属節の示す命題とが「同時」であるということを理解できる、ということである。これは、(11) の構造を考えれば、従属節の時制を司る I 接点か、それを統御する主節の I 接点を飛び越えて、文全体の命題を述べる上での基点、即ち「現在」という時制に接点を持っているということになる。

しかも、この現象は時制の一致の例外に限られたものではない。中国語には時制が音韻的にも文字としても表現されることがない。

(14) a. 我 学 了 丙 年 俄語。

私 勉強する (了 le) 2 年 ロシア語

私はロシア語を 2 年間勉強した。

b. 我 学 了 丙 年 俄語 了。

私 勉強する (了 le) 2 年 ロシア語 (了 la)

私はロシア語を 2 年間勉強している。

c. 到 明年 夏天, 我 学 了 丙 年 俄語 了。

まで 来年 夏, 私 勉強する (了 le) 2 年 ロシア語 (了 la)

来年の夏までには、私はロシア語を 2 年間勉強している。

(于, 張 他 2000: 8-9)⁽²⁾

この場合は、時制の判断は、その文が話されている環境、即ち話者・聴者が立っている「現在」という軸に照らし合わせて、さらに、文中に現れる時制に関わる語句や命題の内容にしたがって解釈されるのである。従って、無標の場合、どの時制も話者・聴者の立つ軸「現在」に常に照合して決定・解釈されると考えられる。つまり、制約がなければ、従属節の時制は、直接上位にある主節の時制に照らし合わせるのではなく、さらに外部にある発話の基点に照らし合わせて考えられているということが出来る。

英語に立ち戻ってみれば、時制の一致の例外が許される場合、従属節 CP 接点は従属節の Infl にとって、通過可能な「通り道」があり、時制の一致が許されない場合は、過去の出来事は過去のことで、として、従属節 CP 接点は従属節の Infl にとって通過不可能な「壁」のような存在になっている。

このように、意味と構造から考えてみると、そのどちらもが、次のような状況を指し示している。即ち、say のような種類の主節の動詞は話者が命題に手を加えられるという点で、また、統御する CP を越えて、話者の立つ「現在」という文が話されている環境まで接近可能な、何らかの「透明な」状態を作っており、whisper のような種類の主節の動詞は、話者が自分の判断を差し込めない「不透明な」状態を作っているということができる。

3. 2. 2 主節の主語

主節の主語が時制の一致に影響を与えるということが、次の例文から観察される。

(15) a. Dante was born in 1265. He regretted that Italy was/??is shaped like a boot.

b. Italy has a funny shape. Dante regretted that it ??was/(?)is shaped like a boot. (Tanaka 1991: 166)

(15) では、文脈を形成する一文が異なることによって、話題の焦点が異なり、従って、それが従属節の時制の一致を要求するのかわからないのか、ということに関わってくるのがわかる。

(15 a) では、Dante に焦点が置かれるため、既に故人となった Dante の感慨というものに注目がおかれるため、現在でもイタリアの地形はかわっていないけれども、即ち現在の事実ではあるが、過去形が従属節に来ることが好まれる。一方、(15 b) では、前文によって、現在の事実という点に焦点が置かれるため、従属節では現在形の方が好まれる結果となったと考えられる。これらのことから、主節の主語が時制の一致に影響を与えること、そして、文脈、即ちこの発話の起こった環境が、影響を与えることがわかる。そして、この発話の環境の中には、話者が文を発話する際の基軸というものが含まれることを念頭に置かねばならない。

これまで、3. 2. 1 及び 3. 2. 2 で見た事柄から、発話の基軸、主節の主語、主節の動詞句は従属節の動詞が時制の一致を示すかどうかに影響を与えるということがわかった。これらは、従属節の外部の要素であるが、では、英語の従属節の内部の要素は、時制の一致について何らかの影響を与えるのであろうか。この側面を次節では考察することにする。

3. 3 従属節の動詞句と時制の一致

(10) と次の例文とを比較してみよう。

(10) a. Maria said that she is pregnant.

b. Maria said that she was pregnant.

(16) a. Janet said that she killed her neighbor's cat.

b. *Janet said that she kills the neighbor's cat.

今度は、ともに、主節の動詞は同じである。しかしながら、(10) では時制の一致の例外が認められるが、(16) では時制の一致が必ず要求される。これはどのようなことからくるのであろうか。時制の一致の例外が認められた (2) の場合の be hungry, (10) の場合の be pregnant, と (16) の kill には明らかな意味の違いがある。時制の一致の例外が認められたものは、「状態」を表すものであり、kill は「動作」を表すものである。「動作」を点と例えれば、「状態」は、その語の意味によって様々ではあるが、「線」のようにある程度の「期間」のようなものを持つのである。もちろん、「動作」を表す動詞であっても、時制の一致の例外が見受けられる場合はある。

(17) a. She said that he told a lie.

b. She said that he tells lies.

しかしながら、時制の一致の例外である (17 b) は彼の (現在の) 習慣的な行為を伝えているものである。現在の習慣的な行為、というのは、過去にも今もしていること、という意味である。従って、その時一回限りの「動作」にあたる (16 a) (17 a) とは種類が異なるのである。(17 b) を (18) のように、(17 a) とは時制だけを変えたのであれば、非文と判断されるのである。

(18) *She said that he tells a lie.

同様のことが (16) の例文にも観察され、仮に隣人の家が絶えることなく猫を飼っているとすれば、(19 a) の従属節の命題が示す内容は、(17 b) 同様習慣的な行為として解釈され、適格文となる。ただし、(19 a) (19 b) の対比が示すように、ここでも従属節の動詞の補部が複数形となって繰り返し行われていることにならないと、適格文とはならない。

(19) a. She said that she kills her neighbor's cats.

b. *She said that she kills her neighbor's cat.

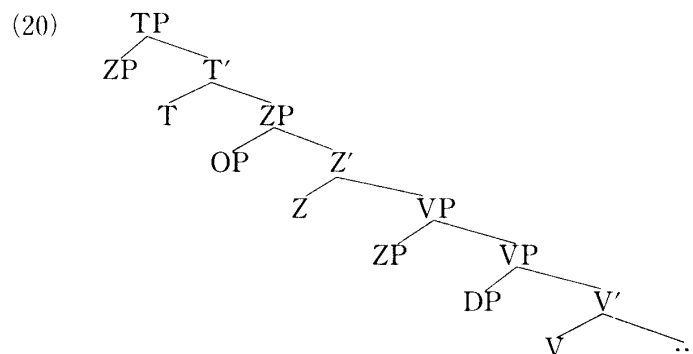
以上の観察から、従属節にも時制の一致に影響する要素があることがわかる。このことを参考に、次には時制の一致のメカニズムについて、構造的な分析を試みる。

4. 時制の同定

4. 1 時制の「束縛」

4. 1. 1 TP と ZP

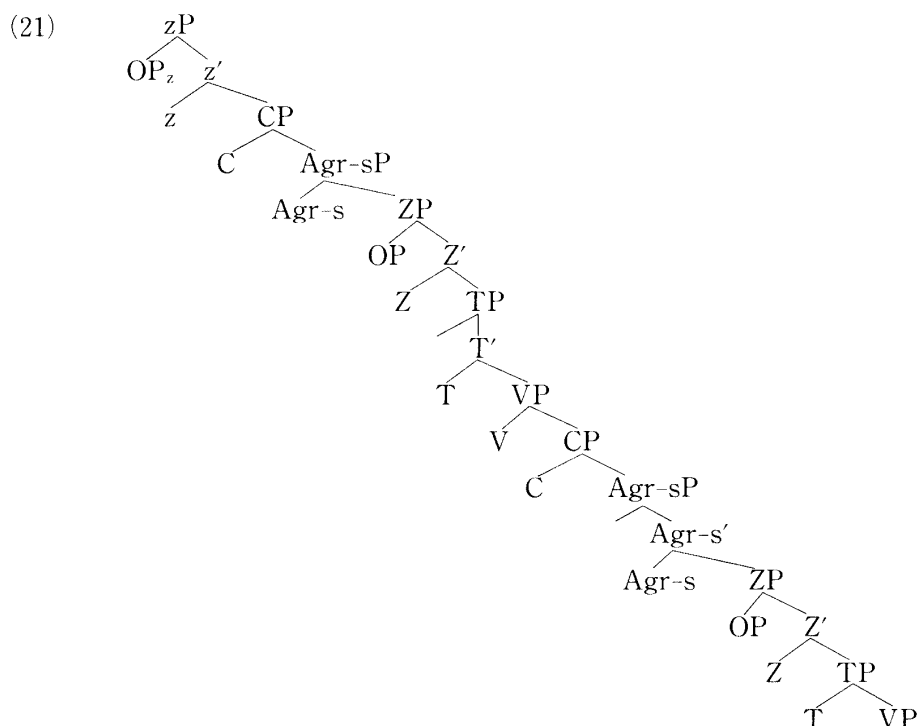
時制の役割について、Zagona (1988) は temporal theta role (時制主題役割) という考えで説明を試みている。Zagona (1988) は、V とその補部 DP との関係が Infl と VP との関係と似ていることから、Infl が VP に時制主題役割を与えたとした。Stowell (1993 a, b) では、この考え方に修正を加えて、Pollock (1989) の Infl を分離した構造を用いながら、新しい機能範疇 ZP を導入し、(20) の構造を提示した。



この構造について、Stowell (1993 b) では、TP と VP の間には ZP という機能範疇があり、この ZP は DP と類似した指示的な性質を持つ機能範疇で、DP と NP の関係と ZP と VP は似たような構造関係を持つ、と説明している。Stowell (1993b) の枠組みでは、T がその補部 ZP に Event Time という主題役割を付与し、TP の指定辞位置に現れる ZP には Reference Time という主題役割を付与することになる。この T の外項にあたる ZP は空範疇で、名詞と PRO と同様の関係がこの内容のある ZP と空範疇である ZP との間にはあると想定している。Stowell はさらに、語彙に明示される時制は極性表現の一種であるとし、認可する要素が文中に存在して初めて認可されるものだとしている。

これらを用いて Stowell (1993b) では時制の一致、時制の一致の例外を説明しているが、特に、分析の核となる要素としての temporal theta role の位置づけが複雑である。動詞が項である名詞に与えるこれまでに述べられていた主題役割とは、付与する範疇も付与される範疇も性質が異なる。確かに、時制も名詞句も指示性というものは持っている。しかし、DP の受け取る主題役割はそれを項として下位範疇化する語彙範疇 V が意味の上で付与すると考えられているが、VP の受け取る主題役割は、Zagona (1988) の枠組みに明示されているように、 $[\pm \text{Past}]$ という時制素性であり、また、機能範疇 I によって付与されるという点でも特異なものである。

そこで、このような点を考慮して、ここでは (21) のような構造を想定する。(21) では、今後の議論に関わるため、Chomsky (1992) で示されるように Infl 位置を細分化して示した。⁽³⁾



Agr-s は VP 内に基底生成した主語が現れる位置とし、T に時制素性が現れると考える。定形節には、Stowell (1993 a, b) に提案されているように、ZP が TP の上位に投射されると考える。Stowell (1993 a, b) で指摘されているように、語彙に表される時制と真に意味する時制とが微妙に異なることに着目して、ZP は真の時制を表す投射、即ち、時制の指示するものを表す投射であると考え、ZP と TP との関係は、DP と NP の関係に類似したものだとする。この ZP の指定辞位置に時制解釈に関わる演算子があるとする。ただし、中国語の例 (14)、や、(15) より、どの節も文の外部と接近できる時制に関する投射があると考え、最上位に zP を設けた。⁽⁴⁾ この構造では、各節の時間の流れを司る ZP の指定辞位置には時制解釈に関わる演算子があり、ZP の主要部 Z に、時制を持つ要素が V から T を経由して繰り上がることで、ZP 内で Rizzi (1990) の枠組みにある指定辞—主要部一致によって、ZP にある演算子と素性を照合することと、上位の節から時制に関して構成素統御によって演算子が何らかの指定を受けることで内容が相対的に同定されることの二つが関わって、文の時制に関する解釈が成り立つと考えるのである。⁽⁵⁾ また、3. 2 節で見たように、主節の要素が従属節の時制決定に影響を与える、ということを考えれば、それぞれの演算子は ZP の上位にある Agr-s P 以上の投射の時制に関する要素とも関連をもつ。

主語の時制に関わる情報は、構成素統御によって、ZP の演算子に何らかの影響を与えることになる。VP 付加詞の要素は中間投射のレベルから主要部を構成素統御するため、時制に関する付加詞がある場合、構成素統御される主要部はこの付加詞の情報を継承すると考える。これがVに付随して繰り上がることで、時制解釈に関わると考える。ここで、時制という情報の持つ特徴が解釈の上で担う役割について、その固有の特徴と依存的な特徴とを次節で確認し、その上で具体的な分析に入ることにする。

4. 1. 2 時制の独自性と依存性

ここで、時制の持つ特徴を改めて考えてみたい。時制は、独自の意味と他者に照らし合わせてその意味を決められるという点で、代名詞と類似性を持つ。

- (22) a. Tom_i thinks John_j admires him_i.
 b. Tom_i thinks John_j admires him_k.
 c. *Tom_i thinks John_j admires him_j.

(22)において、代名詞 him は Tom と同一人物であるか、もしくは、Tom や John とは全く別の第三者である可能性があるが、John とは同一人物であり得ない、ということがわかる。このような観察から、名詞類は Chomsky (1981) など述べられた束縛原理に従うと考えられている。この原理では、代名詞はその統率範疇内で自由でなければならないとされている。(22)では、him とその統率子である V の admire とが接近可能な SUBJECT を含む最小の統率範疇、即ち従属節の Agr-sP において、him が束縛されてはいけないのであるから、同じ Agr-sP 内にある John はその先行詞となってはならない。一方、その統率範疇外にある要素との関係は明示されていないので、従って、(22)においては、him は Tom と同一人物であっても、それ以外の誰かであってもいいわけである。このように英語の代名詞は、何人称で単数か複数か、そして場合によっては女性か男性か、ということまではそれ自体が個別に持っているが、解釈する上では代名詞が現れる環境によってその内容が一部決められてしまう。

一方で、時制について目を向けてみると、時制には、確かに [past] [present] という個別の意味はあるが、これはあくまでも、話者の発話の時に照らし合わせた相対的なものであって、解釈される上では常にこの発話の時の「現在」というものによって決まってくる。代名詞と異なるのは、Agr-sP 内には時制は常に一つしか現れないということである。従って、統率範疇内で自由であっても、その内容が同定されるために上位にある相対比較できる対象と何らかの関係が要求されると考える。

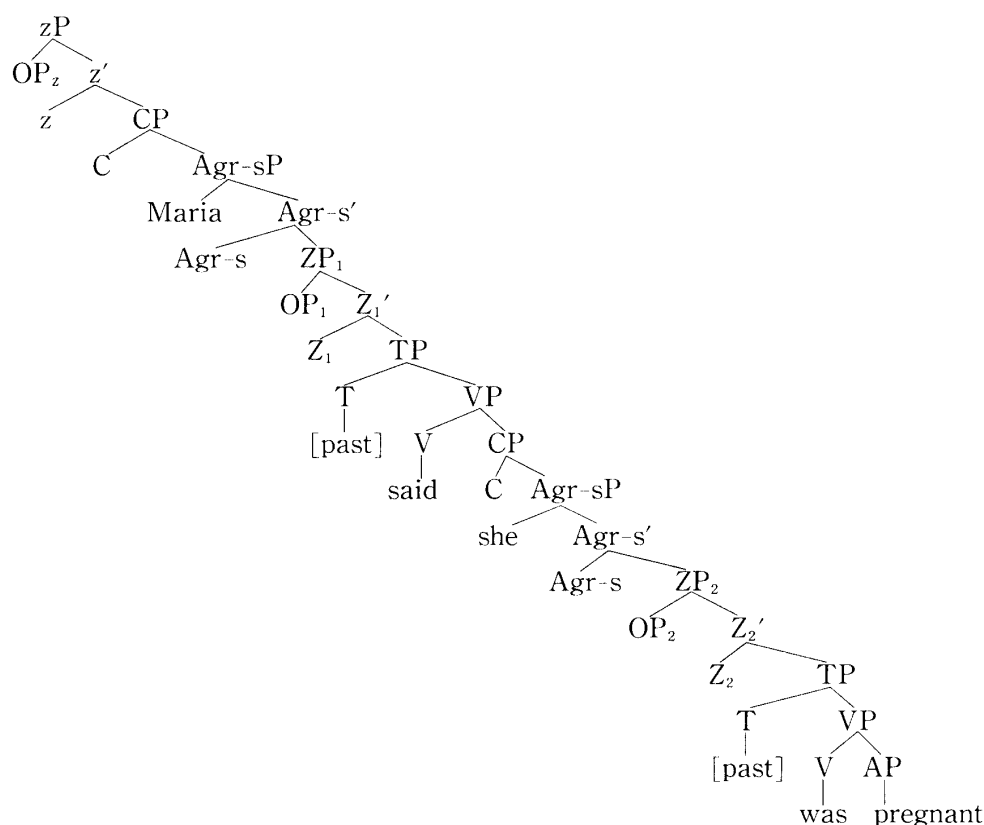
そして、ここで注意しておかなければならないことが一つある。それは、語彙に具現される時制と実際に指示している時制との違いである。英語では、節ごとに動詞要素には具体的な時制が明示されている。しかしながら、これまでに見てきたように、必ずしも見たままの時制であるとは限らない。例えば、(6a) Maria said that Johnny is hungry. では、従属節の is は現在形であるけれども、Referent Time という過去においてもそうであった、ということを聴者は解釈する。また、(17b) She said that he tells lies. でも、習慣的な行為であるという判断がされ、聴者は、彼は過去にもうそをついているし、またつくだろうということをここから受け取るのである。そして、このように解釈するのは、いずれも、主節の動詞が過去形である場合、である。従って、これらの時制はある意味お互いに作用して一つの関数のような役割を果たしていると考えられる。すると、ZP の演算子がある値を持つことと、その節内の T が持つ値とが「関数」を通してある時制解釈を導き出すと考えられる。その「関数」として関わってくるのが時制の代名詞との類

似性、即ち先行詞との関係に相似したものだここでは考える。即ち時制は、個別の意味もある程度は持っているが、その先行詞となるものにさらに意味内容を決定される要素であり、その決定に関わるのが、発話の時や、上位の節に現れる時制に関わる要素との先行詞との同定であると考え。では、次節で具体的に分析していくことにする。

4. 2 時制に関わる素性と時制演算子

(21) の構造を用いれば、(10 b) は (23) となる。

(23) (= (10 b) Maria said that she was pregnant.)



(23 (= (10 b))) Maria said that she was pregnant. や、(6 b) Maria said that Johnny was hungry. など、これに類する文は2種類の解釈が可能である。従属節の出来事が起きたのが、主節の主語が伝達した時と同時である場合と、従属節の出来事が主節の主語が伝達した時よりも前である場合とである。そのため、二通りの解釈を説明しなければならない。

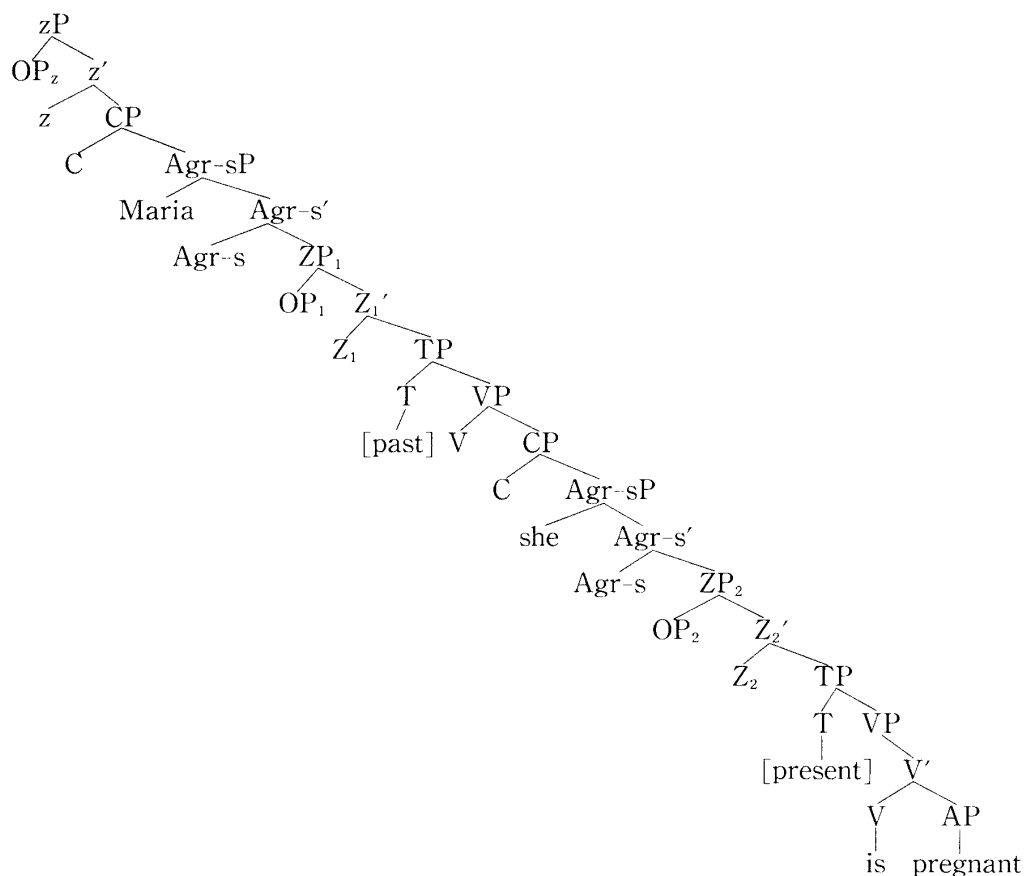
(23) において、特にT以外は時制解釈に影響を与える要素はない。まず、zPのOP_zは、時制について指定をする要素が上位に存在しないため、その外部にある環境、つまり発話の時点での時、「現在」即ち、[present]として時制が同定されると考える。このように上位に何も影響を与える要素がない場合が、不履行の場合と考えられ、常に「現在」と結びつけられる。各節の時制は、[past]であるが、これが、各節のZまで繰り上がって、それぞれのZP指定辞にある演算子を[past]とする。時制が個別の意味を持っているという点から、また、代名詞の場合とは異なっており、統率範疇であるAgrs-P内には常に一つの時制しか現れないため、統率範疇内で自由であるので、従属節外の要素とは同一であっても構わないし、全く別であっても構わない。従って、(24)のように2通りの解釈が与えられるのである。

- (24) a. Maria [past]_i said that she [past]_i was pregnant.
 b. Maria [past]_i said that she [past]_j was pregnant.

(24 a) では、時制に同一指標が与えられているので、同時に起こったと考える解釈である。一方、(24 b) は Maria の発話と従属節の命題の起きたのは、過去ではあるが、別々の時である。留意したいのは、このままでは、(24 b) の場合、従属節の出来事が、Maria の発話時よりも後に起こったというあり得ない解釈も可能になってしまう。そこで考えられるのが、個別の意味として指標はあるが、依存的な部分の決定がまだ残されているところである。これは、上位の節の時制に関わる要素と下位の節の要素との関係から生み出される。ここでは、Stowell(1993 a, b) で述べられたこれらの時制に関する演算子が PRO と似た特性を持っているという考えとは類似した面も持っているが、構成素統御する相手と照らし合わせて時間の流れの中での位置づけを決めることとする。この場合、同じ値、即ち二つの時制が共に [past] もしくは [present] である場合、構成素統御する方が先行詞となることも可能である。また、統率範疇外の要素であるから、主節の ZP 演算子も、先行詞となることが可能である。これは、代名詞 (22) の例で見たことと類似している。どちらか一方の関係しか成立しない場合もあれば、どちらも成り立つ場合もある。両者が成立する場合には、多義的な解釈が可能ということになる。主節の時制演算子は、照らし合わせることでできる対象が、最上位の zP にある演算子しかないので、[present] に対して [past] という全く違った時制がそのまま認められることになる。一方、従属節の時制演算子は、主節の時制演算子が先行詞になれば、同一指標が与えられ、同時という解釈が生まれる。また、最上位の zP 演算子が先行詞になれば、先行する時制、即ち従属節の時制を間に介在させることになるので、基底の位置で上位の演算子が下位の演算子を構成素統御することからも、基底の位置で上位の演算子が下位の演算子より [present] に近いと判断する。従って、(23) の場合、従属節、主節共に [past] という値であるので、束縛関係になることも可能である。すると、同一指標が与えられ、(24 a) の解釈になる。また、最上位の zP と対照されれば、従属節 ZP の演算子は主節の演算子の [past] より [present] からの遠い [past] となり、異なる時制、[past]_j ということになり、主節より一つ古い時制との解釈 (24 b) が得られると考える。⁽⁶⁾

一方、(10 a) は (25) の構造となる。

(25) (= (10 a)) Maria said that she is pregnant.



(25) では、最上位の zP と主節の ZP に関しては、(23) と同じである。従属節 ZP は T に [present] が与えられているため、 OP_2 については、[present] となる。この場合は、主節の ZP と従属節の ZP とで値が違うので、主節の ZP は先行詞にはならず、同一指標ということはない。従って、演算子が同定されるのは、 zP とである。従って、 zP の演算子 [present] と同じ値であるため、同一指標が与えられ解釈は成立することになる。

しかし、ここでもう一つ考えておかなければならないことがある。それは、(25) で従属節と主節の時制に関わる演算子に、同一指標が与えられたが、先に述べたように、実際 (25) の従属節の意味は、「過去も現在も」ということであって、過去を含んでいる。しかしながらこのままでは、それが説明されないのである。ここで注目するのが、従属節の動詞の持つ意味の違いである。そこで、次のような場合を振り返ってみよう。

(16) a. Janet said that she killed her neighbor's cat.

b. *Janet said that she kills the neighbor's cat.

(17) a. She said that he told a lie.

b. She said that he tells lies.

これらが示していたのは、従属節の動詞が一回限りの行為であるか、反復的な、もしくはある期間にわたって起こるものであるのかによって、時制の一致の例外が可能か不可能かということであった。これは、動詞の持つ意味素性が時制に影響を与えていることを示している。動詞に振り当てられる時制が相対的な指標であると共に、このような意味素性が指標の持つ位置付けに影響を与えると考える。これは、stage-level predicates と individual-level predicates という違

いであり、一回きりの行為は「点」であり、状態、反復的な行為は比較すれば「線形」を持っているという感覚がある。従って、時制の指標にも「点」と「線」の違いが生じるのではないだろうか。これを表現すると、

- (26) a. stage-level predicates: end by/at the closest c-commanding time
 b. individual-level predicates: (continue) from/toward
 the closest c-commanding time

というようなものではないだろうか。⁽⁷⁾ 時間というのは線形に流れていくものであるので、これらの意味内容は時間軸の上で点、や、期間を含む→のような形で表現されると考える。

従って、(16 b) (17 b) の場合、主節の ZP が [past] であるが従属節の動詞が stage-level の意味を持つので、end by/at the closest c-commanding time という意味素性をもっている。すると、(25) と同じように、最上位の zP と照らし合わせて、従属節の ZP に [present] が与えられても、その動詞から繰り上がった意味素性 end by/at the closest c-commanding time があるので、[present] と end by/at [past] (主節) が素性の不一致をおこすため、非文となると説明できる。一方、(26) の場合、従属節 ZP は [present] と continue from the [past] が素性の不一致を引き起こすことはない。そして、解釈される「過去も現在も」が適切に説明されている。

ところで、主節の要素が時制の一致に影響することは、3. 2 で観察したが、では、それが構造的にはどのようなになっているのか、ここでさらに詳細に見ていくことにする。

(11) (12) の例文を再度検証してみよう。

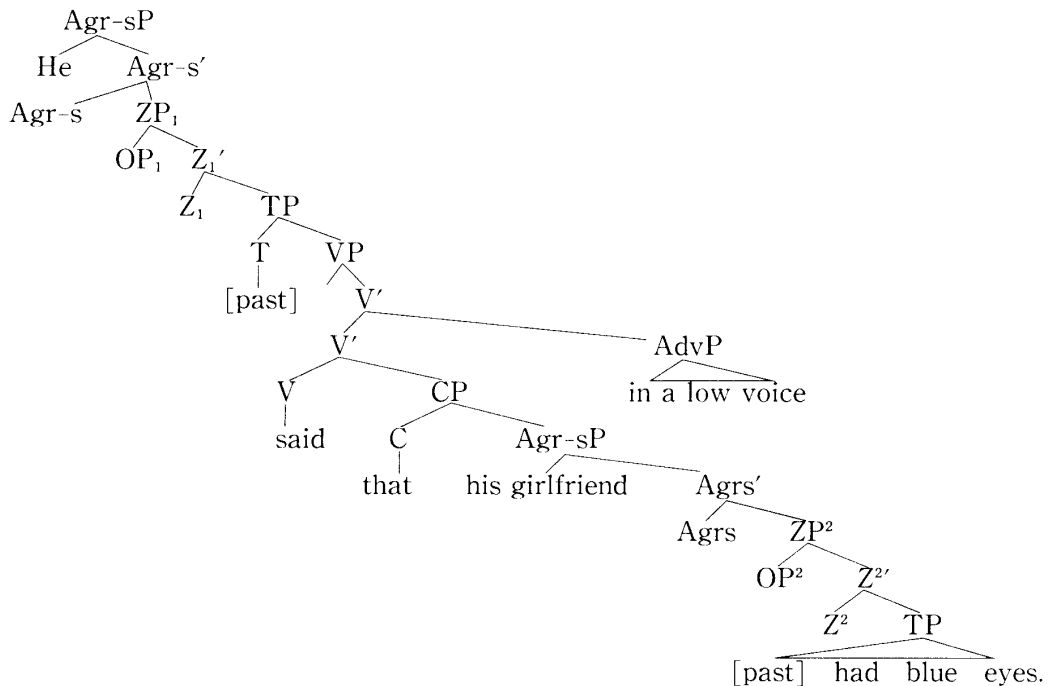
- (11) a. He whispered that his girlfriend had blue eyes.
 b. *He whispered that his girlfriend has blue eyes.
 (12) a. He said that his girlfriend had blue eyes.
 b. He said that his girlfriend has blue eyes.

ここでは様態を表す動詞かそうでないか、という点が時制の一致の例外を認めるかどうかということに関わっていることがわかるが、実際、この文法性の判断は、whisper という様態を表す動詞を用いなくても、様態を表す副詞を用いて、主節の動詞句を said in a low voice としても、同様に判断される。⁽⁸⁾

- (27) a. He said in a low voice that his girlfriend had blue eyes.
 b. *He said in a low voice that his girlfriend has blue eyes.

この場合、様態を表す動詞の場合は、動詞が補部を選択する投射に対して制約を与えと考えることができるが、動詞が (11) と同じである (27) の場合、動詞の選択とはいえない。その点について構造から見てみたい。(27) の関係する部分だけを抜粋した構造は (28) となる。

(28) (= (27 a) He said in a low voice that his girlfriend had blue eyes.)



(28) の構造からわかるように、付加要素である AdvP が従属節を選択しているわけではない。従って whisper であれば、CP に対する統率と考えるとよいであろう。whisper を言い換えた say in a low voice の場合、意味に関して言えば、V の付加詞である要素も加えて動詞の意味素性は決定される、もしくは、付加位置にある意味素性が主要部まで浸透すると考えることができる。こうして、VP の主要部 V の持つ意味素性が決定した段階で統率する CP もしくは V の投射の VP が下位にある演算子にとって接近不可能な「不透明な」ものになると考えられる。もしくは、このような動詞には「様子を詳しく描写する」というような意味素性があるので、過去の出来事であるという意味合いを持ったまま T から Z に繰り上がる段階で、主節の ZP をより「影響力のある」卓立した先行詞としてしまうとも考えられる。その結果、この演算子を飛び越えて zP の演算子とは照らし合わせることができないため、従属節の [present] は解釈不可能な素性となると考えられる。

また、3. 2. 2 では主節の主語が従属節の動詞の時制選択に影響を与えることも見た。ここでもう一度 (15) を検証してみよう。

(15) a. Dante was born in 1265. He regretted that Italy was/??is shaped like a boot.

b. Italy has a funny shape. Dante regretted that it ??was/(?)is shaped like a boot. (田中1991: 166)

実際、焦点が当たるのは、前の文が話題にしているものである。話題は (17 a) では、現在故人となった Dante の [event of past] であり、(15 b) は [present Italy] であることがわかる。確かに発話の時は [present] で、各節内の時制の指示を決定するのに必要な要素であるが、発話の環境はそれぞれ「過去のこと」「現在のこと」に焦点をあてて形成されている。例えば話題が現れる位置が CP 指定辞もしくは C' に付加された位置であると考え、CP 指定辞位置に発話の環境に設定された話題に束縛される空の演算子があると考え、これが、話題

を先行詞とすることで同一指標を受けて、従属節の時制の指示を決定する対照関係に加わることができる。その結果、従属節の時制について (15 a) では、「過去」が、(15 b) では「現在」がより好まれることになる。(15 a) では、最上位の zP 演算子も照らし合わせる対象にはなれるので、「現在」を使用しても非文という判断がおこなわないのであろう。また、(15 b) では Agr-s の指定辞位置にある Dante が故人であるということがわかっているので、この情報が何らかの素性の形で指定辞—主要部一致より Agr-s にも含まれており、この Agr-s が TP を統率するため、T に影響を及ぼしていることが、was を使った場合の非文にはならないがかなり悪いという判断に関係しているのではないだろうか。

以上、時制の持つ依存性と ZP という新たな投射と演算子の関係を利用して、様々な時制の一致、時制の一致の例外の解釈などのメカニズムを提示した。

4. 4 他言語についての考察

ここで、今後の課題として、他言語についてもほんの少し触れてみることにする。ここで、日本語の例である (1) を (29) と比較して再度検証してみる。

- (1) a. ジョニーはお腹が空いているとマリアは言った。
 b. ジョニーはお腹が空いていたとマリアは言った。
 (29) a. ジョニーはお腹が空いているとマリアが言っている。
 b. ジョニーはお腹が空いていたとマリアが言っている。

繰り返しになるが、(1 b) は、この文の話者にマリアが語った時以前にジョニーはお腹が空いていた、と、解釈されるが、(1 a) はマリアが話者に語った時にジョニーのお腹が空いていたという意味である。一方、(29 a) では、ジョニーは現在お腹が空いているのであるし、(29 b) では、マリアが言っているときよりは前にジョニーのお腹が空いていたと解釈される。ここからわかることは、日本語の場合、従属節の時制は主節の動詞によって決められるのであって、従属節の時制は、ちょうど (30) の英語の不定形節に類似している。

- (30) a. Maria is said to be pregnant.
 b. Maria is said to have been pregnant.

日本語においては、従属節の時制は主節の時制によって束縛されている、もしくは時制の指定を受ける、と考えられる。日本語の場合は、従属節の ZP が主節の T によって [past] や [present] という指定を受けると、従属節には独立した時制がないので、従属節の時制がこの [past] や [present] という時制によって値が定められる。英語の単純形の不定形節の場合、主節の時制がそのまま継承され、完了形であれば指定された時制より一つ昔の時制という解釈がなされる。これは、日本語の従属節の現象に似ている。また、これはドイツ語にも見られる現象である。

- (31) a. Sie sagte: "Ich bin müde und will zu Bett gehen."
 She said, "I am tired and want to go to bed."
 b. Sie sagte, sie sei müde und wolle zu Bett gehen.
 She said she was tired and wanted to go to bed.

(三好 1968 : 256-257)

ドイツ語には15世紀までは英語同様時制の一致があったが、現在では時制の一致はなくなり、間接話法では全て現在完了形になる。すると、日本語も不定形の従属節である可能性がある。

さらに、日本語について次のような例を考えてみよう。

- (32) a. マリアは彼がうそをついたと言った。
 b. マリアは彼がうそをついていると言った。
 c. マリアは彼は/がうそをつくと言った。⁽⁹⁾

(32 a) は、一見したところ、時制の一致が日本語にもあるかと思われる例である。(32 a) では、彼がうそをついたのはマリアの発話時と同時かもしくはそれ以前と解釈される。それ以外の場合は、やはり日本語には時制の一致が見られないことが、(1) の individual-level predicate だけでなく、stage-level predicate についてもいえることを示している。(32 c) では、「彼がうそをつく」のは習慣的な行為と考えられる。つまり、マリアの発話時までに過去に複数回起こっていて、従って、彼の属性として考えられていると感じられる。(32 b) はマリアの発話は彼がうそをついた直後に述べられたか、もしくは、誰かの伝聞に対して、マリアの発話時（過去）のその時の状況に反論した発話であると感じられる。すると、(34 b, c) では、(1) 同様の振る舞いが見られるが、(32 a) については、時制の一致にむしろ近い現象が見受けられることになる。しかしながら、(32 a) については、「うそをついた」の部分を to have told a lie と考えることができる。こうすれば、やはり日本語には不定形の従属節であるため、時制の一致が生じないとも考えることができる。また、中国語は (14) は時制は明示されず、発話の時間と、文中の時制に関わる語句、了などの相に関する語が時制解釈に関わってくる。ここでも、ドイツ語や日本語の従属節の完了形と似た振る舞いが観察される。

一方、英語と同様に、フランス語には時制の一致がある。

- (33) a. Il a dit: Je suis heureux.
 He said, “he is happy.”
 b. Il a dit qu’il était heureux.
 He said that he was happy.

これらの言語を見るだけで何かの判断を下すことは適切ではないが、少なくとも、従属節の時制についてドイツ語や日本語のような言語群と英語、フランス語のような言語群とが考えられるかもしれない。仮に、日本語がドイツ語のように従属節は不定形であると考えたと、この言語群に属する言語は従属節の TP は個別の時制素性を与えられないので、全てを他の要素に頼らなければならない。この枠組みにおいては、個別の時制指定を持っていないため、最上位の zP と照らし合わせることはできない。従って、主節の ZP との束縛関係によって全てが決定され则认为られる。ここで役割を果たすのが、完了形である。これは、中国語の例からも認められる。完了形の不定形節は主節の時制より一つ古い時制であると解釈される。単純形の不定形節の時制は主節の時制と同一指標を与えられる。相にあたる AspP の投射が時制をひとつ昔に押しやるメカニズムがあると観察できるが、この点については、そして、様々な言語についての体系的な考察については、今後の課題としたい。

5. 結 語

本論では、間接話法の文における時制の一致とその例外に見られる、時制の解釈について様々な要因を挙げて検討をしてきた。時制を決定する基軸となるのが、発話時であり、これと照らし合わせることで言語に具現された時制が時制演算子を通してどのような時制を指示しているのかを決定づけるということを、Stowell の ZP という新しい投射を設けた分析に一部修正を

加えながら説明を試みた。ここでは、時制が個別の意味を持つと同時に、相対的な指標のような役割でもあるため、ある部分ではその指示する内容を他者に依存して決定されることに着目して、構成素統御を用いて依存部分の同定を行うという分析を試みた。

ここでは単純な間接話法の文だけを取り上げたが、関係代名詞節などの複雑な付加詞が加わった文などをこの枠組みでさらに細かく分析する必要がある。また、他の言語についてこの枠組みが適用できるか、またどのような修正が必要であるかなど今後さらに精査することが必要である。

注

- (1) ここでは、必要とされない限り、簡略した樹形図を用いていくことにする。また、Chomsky (1995) で提示された VP shell を想定し、VP の上位には vp があり、主語はその主題役割によって VP もしくは vp の指定辞位置に基底生成され则认为る。
- (2) (于, 張 他 (2000)) に論じてあるが、文中に現れる了などは相 (アスペクト) であって、絶対時制ではない。
- (3) T の補部としては Agr-oP が現れると考えるが、ここでの議論では関連しないので省略した。また、ここでは、Niwa (2000) の分析とは若干異なる分析をしているが、代案の一つとしてここではこの枠組みを提示してみた。また、時制素性について [±past] と表記すべきところであるが、わかりやすく [past] [present] と標示していくことにする。
- (4) この最上位の zP やその指定辞位置にある演算子について、zP は CP であり、演算子は CP の指定辞位置にあると考えて、新たな投射を設けない可能性については、Wh 疑問文等で CP 指定時位置が利用される場合、この位置が利用不可能なことからも、時制解釈の演算子の位置としては不適当であるとする。ただし、zP を設けなくても、丁度代名詞が恣意的な先行詞をとることができるように、何も制約がなければ、常に CP 外の話題の場と照らし合わせることができると思うことも可能である。この可能性についてはさらに考察する必要がある。
- (5) 時間を司る投射の指定辞位置に演算子が現れると考えることについては、Rizzi (1990) での CP 内における CP 指定時位置の wh 演算子とその主要部 C との関係についての考察をもとにしている。
- (6) 付加詞節にあらわれる ZP は、その付加された投射内の主要部に影響を与えるが、その主要部のところで情報は統一されるので、ここで述べた演算子同士の相対的な評価には関わっていない。
- (7) i) (26 b) は「線」であるため、例えば We are reading this book. といえ、過去から今に至るまで線形にまたがっていることになる。従って、これを表すため、このような表現を用いた。
ii) これらは、Krazer や Higginbotham (1985) が論じた動詞の項構造に Event 項が有るかどうかなどという問題に関係があると思われる。ここでは、Higginbotham (1985) に従って、どの動詞にも Event 項が有るとし、ただし、stage-level predicates と individual-level predicates ではその項構造が異なると思いたい。このことが反映されているのだと考えるが、これについてはさらに精密化が必要である。
- (8) said softly としても同様の判断が得られる。また、田中 (1991) には mutter を用いた同様の例が挙げられている。
- (9) (32 a, b) と比較すると (32 c) の文では、「は」と「が」の生起の判断が若干違うため「は／が」とした。この問題は、主格、もしくは話題等に関わる事柄で、時制解釈に直接関わらないので、ここではこれ以上言及しない。

参考文献

- Chomsky, Noam. 1981 *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris
- Chomsky, Noam. 1992 A Minimalist Program for Linguistic Theory, MIT Occasional Papers in Linguistics Number 1, MIT

- Chomsky, Noam. 1995 *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: the MIT Press.
- 張 秀, 馬 慶株 他 2000 于 康, 張 勤 編『中国語言語学情報 2 テンスとアスペクト I』好文出版
- Enc, Muvert. 1987 Anchoring Condition for Tense, *Linguistic Inquiry* 18, 633-657
- Higginbotham, James. 1985 On Semantics. *Linguistic Inquiry* 14, 395-420.
- Hornstein, Norbert. 1977 Towards a Theory of Tense. *Linguistic Inquiry* 8, 521-557
- Hornstein, Norbert. 1981 The Study of Meaning in Natural Language: Three Approaches to Tense. in *Explanation in Linguistics*, ed. N. Hornstein and D. Lightfoot, 116-151, Longman.
- Hornstein, Norbert. 1990 *As Time Goes By: Tense and Universal Grammar*. Cambridge, Mass.: the MIT Press.
- 三好 助三郎 1968『独英比較文法』郁文堂
- Niwa, Satomi 2000 The Mechanism of Tense Interpretation in Finite Clause. *Linguistic and Philology* 19, 219-235.
- Pollock, Jean-Yves. 1989 Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP, *Linguistic Inquiry* 20, 365-424.
- Rizzi, Luigi. 1990 *Relativized Minimality*. Cambridge, Mass.: the MIT Press.
- Stowell, Tim. 1993a The Phrase Structure of Tense. *Phrase Structure and the Lexicon*, ed. J. Rooryk and L. Zaring, 277-291, Dordrecht: Kluwer.
- Stowell, Tim. 1993b Syntax of Tense. ms University of California.
- 田中一彦 1991 英語における時制の照応について『英文学研究』第67巻, 159-172
- Zagona, Karen. 1988 *Verb Phrase Syntax: A Parametric Study of English and Spanish*. Dordrecht: Kluwer.